

# 「新しい女」の模範を示す詐欺師

—ギルマン『ベニグナ・マキャヴェリ』

山 口 ヨ シ 子

## I ギルマンのコンフィデンス・ウーマン

シャーロット・パーキンス・ギルマン（一八六〇—一九三五）は、『ベニグナ・マキャヴェリ』（『フォアラナナ』）第五卷、一九一四年において、「新しい女」の模範を示す女詐欺師（コンフィデンス・ウーマン）を描いている。<sup>(1)</sup> 女主人公ベニグナの幼児期から二十一歳になるまでを記録するこの小説で、彼女は次つぎと詐欺（コンフィデンス・ゲーム）を働く。おもに無力な女性を助けるためのゲームであり、そのゲームに駆りたてるのは、因習的な社会規範にとらわれない「新しい女」の思想である。深い洞察力をもって他人を操り、女性のよりよい生き方を探るベニグナの行為をつうじて、ギルマンは「新しい女」の模範を示している。

ヴィクトリア朝的「真の女らしさ」の規範から脱却した「新しい女」は、女性参政権運動の高まりを背景に、二十世紀への転換期に出現した。<sup>(2)</sup> 十九世紀のアメリカを席巻していた、女性を私的領域に押し留める考えは、世紀の終りには、公的領域で活動する新しいタイプの女性たちの出現によって揺らぎ始めた。「新しい女（the New

Woman)」という用語じたいは、一八九四年頃に作られたという(マッシュューズ 一三)。「新しい女」は、女性をめぐる価値観が大変換を遂げつつあった時代の象徴であり、フランス、イギリス経由で輸入されたばかりの「フェミニズム」という語を、たちまち流行語にする原動力になった(コット 一三)。

そのフェミニズムを「全世界の女性の社会的めざめ」(コット 一四)と定義したギルマンは、当時の「考える女性」に向けて『女性と経済学』(一八九八年)を著した。ターゲットを明示しているのは、女性たちに「個人としての社会的責任」とともに、「人類を作りだす者として、種族にとつての計りしれない重要性」を認識させたいと願ったためである。ギルマンは、この著作のなかで「新しい女」について言及し、「より正直で、勇敢で、強く、健康で、優れた技術をもち、有能で、自由で、すべての面においてより人間的な」女性と定義している。

ギルマンによれば、「男性中心の文化 (androcentric culture)」に強いられた「偽りの感傷主義、偽りの優美さ、偽りの謙虚さ」などを払拭し、一人の人間としての人格を確立した女性ということになる。社会で「人間の仕事をする男性に家で「仕える」ことを「自然な義務」ととらえることなく、自らも社会的責任を果すことによって男性同様、「人間」となる女性である。自分の月刊誌『フォアランナー (The Forerunner)』に掲載した「女性の人間性」(一九一〇年一月号)と題したエッセイでは、「新しい女とは、徹頭徹尾人間である」と書いている。

「新しい女」のイメージは、当時急速な発展を遂げつつあったメディアによって流布した。新聞や雑誌には、「新しい女」についての論議があふれ(マッシュューズ 一三)、アメリカ女性の快活さ、明朗さ、たくましさなどを強調する写真や挿絵などが多く掲載された。とくに、チャールズ・ギブソンが描きたいわゆる「ギブソン・ガール」は、一八九〇年代『ライフ』誌に掲載されたのを皮切りに、新聞や雑誌の挿絵として人気を集め、「新しい女」のイメ

ージを広く浸透させる役割を果たした。重いコルセットやペチコートなどを脱ぎ捨て、ハイネックのブラウスに長いゆるやかなスカートという出立ちで、戸外で活動する女性を描いた絵は、世間の人びとに「新しい女」の出現を実感させた。

「ギブソン・ガール」は、「ゴルフの試合などで男性たちに引けをとらない」姿を示す一方、「その人生の目的は夫を捕まえることにある」という「限界」を示す、という指摘もある（ラドニツク 七三〇）。大量移民の時代にあつて、「『純粋な』アングロ・サクソン民族が雑種化する脅威」に対する反動として人気を得た、という見方もされている（七三三）。だが、自転車に乗ったり、スポーツに興じたりする「ギブソン・ガール」が、女性の生活に変化が起きたことを広く知らしめたことは間違いない。ギルマンは、『経済学』で「ギブソン・ガール」を「新しい女」と呼び、「気高いタイプの女性を表象する」と述べている。

「新しい女」が出現する背景には、女子高等教育の充実とそれにとまなう社会進出の機会拡大がある（ラドニツク 七〇）。大学で学問を修めて医学や法学などの専門分野に進出する女性とともに、速記やタイプなどの技術をもつて働く女性も増え、家庭を女性の「適切な領域」とするそれまでの社会規範にとらわれない生き方をする女性が多くなった（アモンズ 八二―八三）<sup>5)</sup>。「近代女性史においてもっとも意義深い出来事」と歴史家が呼ぶ、白人中産階級女性の賃金労働への参入が急激に進み（八三三）、自分に自信をもち、アメリカ社会における女性の地位に疑問を抱く女性が、飛躍的に増えたのである（ラドニツク 七〇）。

サラ・エヴァンズやルイ・ラドニツクなどが指摘するように、「新しい女」の出現に女子大学が果たした役割は大きい（一四七、七〇）。南北戦争後、あいついで設立された女子大学では、<sup>6)</sup>学問をすると生殖機能に害を及ぼすと

いう「因習的な考えに異議を唱えた」女性たちが、「教師やクラスメートと深い愛情に満ちた絆を築いていた」（エヴァンズ 一四七）。とくに社会学や文化人類学などの分野でパイオニアの役割を果し、「女子学生が男子学生同様の学問的水準と健康な身体を維持していることを助け合いながら証明した」（ラドニック 七〇）。

彼女たちは「ジェンダーが社会的に構築されることを申し立てた第一世代」（ラドニック 七〇）であり、卒業後も、ヴィクトリア朝的男性中心の社会秩序に対抗して女性同士の結びつきを強めていった。半数ほどは独身でとおし、結婚しても多くの子どもをもたず、拡大しつつあった女性の職業に参入するとともに、社会活動や政治運動を実践していった（エヴァンズ 一四七）。

ヴァッサーやスミスなどの女子大学では、ギルマンの『経済学』なども、教科書として使われたという（佐藤四三）。女子高等教育の充実は、ギルマンがこの著作で目指したような、社会的責任についての「新しい認識」を女性にもたせる結果になり、女性の公的領域への進出を確実に推進したのである。

ギルマンが『ベニグナ』で描くのは、このような高等教育を受ける機会に恵まれたエリート女性ではない。物語には、牧師や医師など、高い教育を受けて専門職に就く女性も登場させているが、中心となるのは、「並みの教育」を受けただけの少女が独学で技術や知識を身につけ、「新しい女」に成長するさまである。父親が「一家の長」として権力をふるう中流家庭に育った少女ベニグナが、母親や姉の自立を助けながら、自らも自立を果す過程が描かれる。ギルマンが「人工的家庭（The Man-Made Family）」と呼ぶ「男性が作った（man-made）」「男性中心の（androcentric）」家庭が、男女平等の「自然な」家庭に改革される様子が、改革を実行するベニグナの視点で記録されている。コンフィデンス・ゲームは、その改革を推し進める奥の手であり、そのゲームを支えるのは、女性の



精神的・経済的自立を推進する「新しい女」の考えである。

ベニグナは、自らの人生を語ることで「新しい女」のマニユアルを示す。ギルマンが、読者と等身大のヒロインをつうじて、新しい女性の生き方を示したことは、小説が『フォアランナー』に連載されたことを考えれば、不思議なことではない。この雑誌は、ギルマンが自らの斬新な思想を広く啓蒙する目的で採算を度外視して発刊したものである。内容は、連載小説、連載エッセイ、短編小説、詩、書評、時局についてのコメントなど多彩であったが、ギルマンはそのすべてを一人で書いた。自らのライフワークを「新しい考えを鼓舞し、宣伝すること」（レイン〈2〉一六三）と認識し、その目的を遂行するために自分の雑誌をつくり、多様な文学形態を用いたのである。<sup>17)</sup>

同時代の作家メアリー・オースティンは、『フォアランナー』が「つねに同じ内容を扱っていると批判している（シャーホースト 八五）。ギルマンは、多様な文学形態に挑みながらも、オースティンが批判するとおり、たしかに一つのメッセージを伝え続けた。「すべての人間はその社会環境を作り変えることができる」（レイン〈2〉一六三）というメッセージである。『フォアランナー』に十二回にわたって連載された『ベニグナ』には、当然ながら、ギルマンのそのメッセージが深く投影されている。ベニグナがしかけるコンフィデンス・ゲームは、社会環境を作り変えるための速効手段である。少女に詐欺を働かせることは、社会が変えられることを「面白く」描くことで、自分の「新しい考え」を啓蒙しようとしたギルマンの戦略でもある。

本稿では、ベニグナを「新しい女」の模範を示す詐欺師ととらえ、その詐欺師像の分析を試みたい。小説が『フォアランナー』に掲載されたことをふまえ、ギルマンが既成の概念と異なる自分の考えを、いかにコンフィデンス・ウーマンとしてのベニグナに託したかを明らかにしたい。

## Ⅱ ベニグナ・マキャヴェリ、コンフィデンス・ウーマン

ベニグナが詐欺師であることは、自らが密かに名乗る「マキャヴェリ」という姓によって証明される。スコットランド系の「マックアヴェリ (MacAvelly)」が実名であるが、彼女は幼くして「マキャヴェリ (Machiavelli)」を自分の姓として選ぶ。イタリア人の祖母が、策略家として名高い政治家ニッコロ・マキャヴェリ一族の直系であることを誇りに思い、その名前に自己のアイデンティティを求め、スコットランドの名前を「レインコートのように外側に身につけながら」、その内側でイタリアの有名な策略家に自己投影し、「人を操って」人生を歩む決意をする。マキャヴェリという姓に自己の存在理由をみだし、密かに策略をめぐらして生き抜く決意である。二つの名前を使い分け、本来の自分を隠して他人を操るといふベニグナの行為は、詐欺師のものである。

ベニグナの詐欺師としての特徴は、「善良な悪人 (a good villain)」になる、というその決意に表れている。歴史上の策略家マキャヴェリに倣って策略をめぐらすのであるが、ベニグナは、その行為を「消極的で、無抵抗の」善人を助けるために行う。善人は「悪いことが起ると、忍耐、辛抱、断念などの美德を行使する」が、それでは事態の解決にはならない、というのがベニグナの主張である。悪人が頭脳を駆使して事態を都合よく進展させても、最終的には神の裁きがくだることを知り、彼女は「頭の切れる善人」ならば、社会を改善して生き残れると考える。悪人の頭脳をもって策略を練り、善人の実利をはかるために詐欺を働く、というのがベニグナの姿勢である。

ベニグナが「悪」の頭脳で「善」を行う決意をするのは、「変化をもたらす」という意志が強く働いているためである。「子どもたちから革命を起す」必要を感じ、彼女はその社会環境を変えるために詐欺行為に及ぶ。「子ども

もだつて、自分たちの強さを認識しさえすれば、多くのことを成し遂げられる」という自説を、詐欺を働くことで実証するのである。その根底には、目の前の現実を変えて実益を得る、という徹底した実利主義がある。ベニグナにとつて、「もつとも面白く、大きいゲームは生きること」であるが、その目には、「ほとんどの人がへたなプレーヤー」と映る。彼女は、「無限に広がる」人生というゲームを、「有益に」「楽しく」プレーしたいと望むのである。

ベニグナが働くもつとも大がかりな詐欺は、家族を救うためのものである。姉ペギーの駆け落ちを阻止するため、の詐欺と、母を救うために父を家から追いだすための詐欺である。ベニグナはこのいずれにおいても、人の心理を巧みに操る詐欺師の素養を発揮して成功をおさめる。十八歳の姉が不幸な結婚をするのを未然に防ぎ、母親を不幸な結婚生活から救出している。姉と母はいずれも一家の「王」として君臨する父によってその人生の方向を見失うが、ベニグナは、「女は王を操ることもできる」ゆえに「もつとも強い」と信じ、それを現実に成し遂げる。子どもが起した革命は、女の手で家の「王」を追放してその権力を失墜させる革命となり、女の強さを実証する結果となる。

ベニグナは、その奇抜な発想力、即座の判断力、優れた演技力などをもって姉を救う。姉が不実な男性に人生を託すのをやめさせるために、彼女は二人の異なった女性に同時に変身する。姉の恋人に別の女性がいると確信する彼女は、姉が家出した夜、闇に紛れて、姉とその女性を同時に演じる。姉がかぶるようにスカーフをかぶり、姉が呼ぶようにその恋人に呼びかけ、ベニグナは彼に対して自分を姉だと思わせる。同時に、彼と自分が一緒にいるところを姉にみせ、彼女には恋人が他の女性と一緒にいるように思わせる。姉はベニグナを抱擁する恋人の姿を彼の不実の証と受けとめ、彼との駆け落ちを即座に断念している。

ベニグナは、幼少時から、寸劇を書き、演出し、演じることに優れた能力を示す。このような能力は、姉の人生の一大事を救うことにおいても、同様に発揮される。二つの名前をもち、「善良なる悪人」という真逆な要素を一人の人格のなかにもつベニグナにとって、社会という劇場で演じることは日常茶飯事となる。二人の人物を同時に演じるという意表をつく発想や、それを危機一髪事態に実行するという当意即妙の判断力も、ベニグナのコンフイデンス・ウーマンとしての力量を証明する。

姉を救う詐欺において、もう一つの重要な働きをするのは、ベニグナの洞察力である。彼女は、なぜ姉が軽率妄動に走るのかを分析したうえで、姉の心理を揺動する作戦を立てる。ギルマンは、短編「ピンクの帽子をかぶった少女」(『フォアラナー』一九一六年二月号)でも、人生の岐路に立つ無垢な娘が世間を知り抜いた第三者に救われるテーマを扱っている。同様のテーマをくり返し扱うのは、ギルマンが若い娘の教育に関心を抱いていた証であるが、物語としては、『ベニグナ』の方が説得力に富む。人生の選択を間違える娘の心理が、自らを「社会常識の神童」と呼ぶベニグナの視点で分析されているためである。

ベニグナの分析は、父親が絶対権力をもつ家庭における娘の不幸を厳しく指摘するものである。彼女は、姉が「金持ちの青二才」の甘言に屈するのは、娘に因習的な生き方を強要する父親のせいだと考える。「娘の居場所は家庭にある」と盲信する父親が、娘の将来の夢を摘みとるために、娘は「手の早い」男性の罠に落ちるのだと主張する。

大学進学希望やオペラ歌手になる夢も、女だというだけで断念させられれば、娘は「いつも焦って間違った男性と結婚してしまう」というのが、ベニグナの意見である。彼女は、「人生に楽しみも自由ももてない」姉が、「卑

劣な父親をもったばかりに、その全人生を台無しにされる」状況を明らかにする。父親の権力から逃れたいがゆえに、単なる「刺激」を「恋」と思いこんでしまう姉の精神構造を分析して、父親中心の家庭における若い娘の窮状を訴える。

ベニグナは、刺激を恋と混同する姉を「愚か」と呼び、姉が夢みる駆け落ち後の生活設計の悲惨な結末を予測する。男性の甘言を鵜呑みにし、「決して頭を使わず」、読書や実体験によって学習しないと、その「気楽さ」を嘆きもする。だが、そのような姉の姿に「家庭の暴君」たる父親が施す教育のひずみが表れていると考え、姉を救うための詐欺を決行する。女性の「主要な魅力」として「イノセンス」を「必要条件」とする、「男性中心の文化」が生みだした教育のひずみである。

ベニグナは、「『手の早い』という意味がわからない」姉に恋人の不実を悟らせるため、心理作戦を敢行する。姉の前で一芝居する前に、「きわめて抜け目のないやり方で」その嫉妬心に火をつける。「愛していれば、どんなに貧乏でもかまわない」と思うベニグナは、姉が恋人の金銭状態を自慢するのを聞き、その愛がほんものではないと確信する。だが、「ちよつとでも恋すれば、人は嫉妬深くなる」と考え、「イアーゴよりもっと繊細に」姉の嫉妬心を駆りたてる。恋人の享樂的な生活について、無垢な姉の心に「注意深く毒を盛り始める」のである。

姉はやがて本心をみせはじめ、「男の人がほんとうに女の人を愛していれば、別の女の人なんか見向きもしないわ」と言うようになる。ベニグナが扮するのはその「別の女性」である。恋人が別の女性に関心をもつたらすべてを終りにする、と姉に言わせたうえで「別の女性」を演じ、姉に恋人の不実を認識させている。ベニグナは、人の心を読み、その心を操って、自らの作戦を成功に導いている。



ベニグナの行為は、姉への善意に発したものにせよ、その人生に介入するものである。姉には、自分の人生を自分で選んで生きる権利があり、失敗から学ぶ権利もあるはずである。だがギルマンは、ベニグナが姉の幸せを心から望んでいるという理由で、その行為を正当化している。人間の真贋を見抜くことができる社会性をそなえた妹が、世間知らずの姉を救う唯一の手段として仕組んだコンフィデンス・ゲームとみなしている。

そればかりか、ベニグナのゲームは、男性が求める若い娘の「イノセンス」が、男性の女性支配に都合よければかりで、当の女性には「賢い夫選びの手段とならない」ことを厳しく告発する。ギルマンが『フォアランナー』に連載したエッセイ「男性中心の文化 (Our Androcentric Culture; or, The Man-Made World)」(一九〇九年十一月号―一九一〇年十二月号)で糾弾するように、若い娘が「身に迫る危険ささえ察知できない」ような「イノセンス」のなかで育てられる「弊害を女性の視点で糾弾している」。

ベニグナが父親を家から追いだすために計画したゲームは、姉の場合のように、善意に発するものではない。家族の「主人、所有者、刑務所長」としてすべてを「命令し、禁止する」父親を憎み、悪意をもって、その人生に介入している。実父に激しい怒りを抱く自分が、世間では「不自然な娘」とみなされることを認識しながらも、その権力を排除するべく、彼にゲームをしかける。家庭経済の担い手であることを笠に着て家族のうえに君臨し、酒を飲んで言葉による暴力をくり返す「酷い父親」を「排除する」ためのゲームである。

「サルタンのように」ふるまう父の機嫌をとるために、「忍耐強く無駄な努力」を重ねてきた母が、ついに「幸いにも死ぬか、無情にも気が触れるか」という瀬戸際まで追いつめられたとき、ベニグナは母親を救うために策略を練る。そこには、家長に奉仕する「家政婦の地位」から母親を解放し、あらたに、女性が人間として生かされる民



主的な家庭を作るといふ決意がある。

「父親を排除する」ための詐欺では、ベニグナのコンフィデンス・ウーマンとしての底力が発揮される。姉を救うための詐欺では、即座の判断力や発想の斬新さが功を奏するが、姉よりも一段と手強い父親をだますには、綿密な計画性が問われることになる。ベニグナは、「簡単なことではない」と認識したうえで、いかに父親を操るかに「すべての注意を集中する」。そのような覚悟で決行するゲームは、ベニグナの詐欺師としての「本領」を発揮するものとなる。

ベニグナがとる戦略は、第一に、だます相手と友好関係を築くことである。父親が「自然な娘」と考える、親に従属する「よい娘」を演じ、その仮面の下で、父親と「緊密な調和の関係」を築きあげようとする。父親を間近に観察してその最大の関心事が「科学や発明」であることを知ると、自分もその分野の勉強に力を注ぐ。「親は自分の性質が子どもに引き継がれることを好む」と信じ、父親を喜ばせるのが目的である。

機械工学や電気などに関する論文を読みあさっては父親に教えや忠告を乞い、彼が子どもよりも優れていると実感できるように努める。ベニグナは、「すぐに苛々し、説明に飽き、威張って恩着せがましい態度をとる」父親の虚栄心をくすぐりながら、彼と「友好協定」を結ぶことに成功する。だます相手を知り抜き、その関心事をおして相手の懐に入り込み、その信頼を勝ちとっている。伝統的ジェンダー概念をこえる能力を発揮して、女性蔑視が強い父親に「女の子にしてはかなり頭がいい」と言わせるほど、その心を掴んでいる。

ベニグナが次にとる戦略は、だます相手の弱みにつけ込むことである。「本攻撃」と称して、父親の郷愁を募らせることに総力をあげる。故国スコットランドの歴史、小説、詩歌などを、彼よりも詳しくなるほどに勉強し、と

もに語り、読む時間をつくる。音楽が得意な姉を説得して、夕食後には古いスコットランドの歌を歌わせ、家中を故郷の雰囲気で満たす。父親の琴線に触れる言動に徹して郷愁を募らせ、その思いが極限に達するころに、故郷に旅立つきつかけを用意する。家で講読しているスコットランドの週刊新聞に広告を出して、父親の目に触れるようにするわけである。「故アンドリユー・アングラス・マックアヴェリの最近親者が十日以内にエディンバラ市ブラッキー通り一〇九番地に自ら出頭すれば、一家の利益になるでしょう」という広告である。父親は十代の娘の思いつきにはまっぴら、即座にスコットランドに旅立っている。

ベニグナの詐欺の基本は、どの明敏な詐欺師にも共通することではあるが、だます相手の欲するものを、ほどよい時期に提供することである。ベニグナは、父親が故国での投機に関心をもっていることを知り、渡航の機会を絶好のタイミングで用意したことになる。父親の信用を得て会話を交すなかで商売上の悩みを聞き、その情報を逆手にとって、彼の胸に新しい商売の夢を抱かせる広告をだしたのである。海のかなたの新聞に広告をだすにあたっては、きわめて周到な手順を踏み、英国在住の友人なども有効に使っている。父親のホームシックを駆りたてておき、大西洋を股にかけた煩雑な通信のやりとりを経て、ベニグナは父親を家から追いだすことに成功している。

ベニグナは詐欺を働きながらも、多くの場合、だます相手から金銭を奪い取ることを目的としていない。それどころか、父親に挑んだ詐欺では、新聞広告をだすにあたって、自分が苦勞して貯めた虎の子までも使っている。物質的・金銭的利益をあげることには決して無関心なわけではなく、小学生のころには、教室用の地球儀や高い観劇料をだましとったりもしている。だが、詐欺行為に及ぶ目的を、「あらゆる人を、あらゆる方法で、それと知られずに助けること」とするベニグナは、物質的・金銭的利益をあげることには執着することはない。

マキャヴェリのみならず、レディ・マクベスやイアーゴなどに自らをたとえ、人を操ることを信条としながらも、その目的はつねに弱者の利益のためにある。ベニグナの最大の関心事は、無力な女性たちの精神的・経済的自立を支援することであり、彼女にとって、金銭は他人から奪うものでなく、自分で働いて得るものである。彼女のコンフィデンス・ゲームは、おもに、女性の自立、および自立支援の妨げとなるものを排除する手段である。

### Ⅲ 「不自然な娘」の改革

ベニグナのコンフィデンス・ウーマンとしての役割は、ゲームに勝利したところで終ることはない。彼女はたしかに、詐欺を働く過程で、男性が権力をもつ家庭でいかに女性の人権が侵害されているかを明らかにする。そうすることで、作者の「社会批判の便利な道具」（クールマン 二二）としての詐欺師の役割を果す。若い娘が家庭を「女性の適切な領域」と信じる父親にその人生の夢を摘みとられ、妻が夫のドメステイック・ヴァイオレンスで心身の破綻をきたすさまを告発する。だがベニグナの役割は、このように女性の窮状を告発することだけに留まることとはない。社会環境を作り変える「目的をもって」小説を書いたギルマンが創造した詐欺師には、「変化をもたらす」ための明確なヴィジョンを提示することこそ、より重要な役割となる。ベニグナは、家の暴君を追放することで姉や母を救ったのち、二人の独立した新生活まで計画し、彼女の革命は、女の生き方を変えるところまで及ぶ。「女だって、自分たちの強さを認識しさえすれば、多くのことを成し遂げられる」ことを、新しい女性の生き方で実証する結果になる。

ベニグナは、自分の周りにいるどの女性の自立支援にも力を注ぐが、その最大の支援を母親に向ける。父親を家から追放したあと、母親の唯一の財産である家屋を活用して下宿屋を始め、そこに彼女の居場所を用意する。「黄色い壁紙」(『ニューイングランド・マガジン』一八九二年二月号)のヒロインのように、結婚生活の「檻」に捕われて、精神破壊の危険な淵をさまよっていた母親は、娘が始めた下宿屋商売のなかに病氣回復の機会をみいだす。下宿人に母親のような愛情を注ぐことから始め、最終的には、下宿屋運営の全責任を担うまでになり、「自分のお金を稼ぐことを楽しむ」ようになる。自分が家族以外の人間に役に立ち、それが金銭で評価されて自らの生活を支える手段になることで、「家族の召使い」ではなく、「社会に奉仕する」喜びを知るのである。

ベニグナが姉や母を動員して始めた下宿屋ビジネスは、たとえば「正直な女性」(『フォアラナー』一九一一年三月号)のヒロインのように、ギルマンが創造した女性キャラクターには、しばしば経済的自立の便利な手段となる。自伝によれば、ギルマン自身も一時期従事したことがあるというこの仕事は、無給の家事労働に従事していた女性たちに、有給のプロフェッショナルな仕事をする絶好の機会を提供する。家事労働をビジネスとして「社会化」することで、女性が家庭の呪縛から解放され、その潜在能力が社会で生かされるというギルマンの主張は、『ダイアンサがしたこと』(『フォアラナー』一九〇九年一月号)一九一〇年十二月号)などでより包括的に展開されている。ベニグナの母親が人生に活路をみいだすのも、その「社会化」の結果である。

ベニグナは母親が働きやすいように入念な援助を施すが、かつて「母親の人生は子どもの中にある」と公言していた母親は、自分の主婦としての経験や「母親の優しさ」溢れる性格を生かすキャリアに人生の意義をみいだす。「四十歳でプロの祖母になる」人生を捨て、プロの仕事人として身を立てるのである。彼女は、『経済学』における

ギルマンの言葉で言い換えれば、社会とかかわる仕事に「自分の能力を行使する余地」をみつけ、その仕事が「自分の経済状況に影響を与える」ようにする。「人間生活においてつねに重要な要素であった母親としての労働力」を、「富を生みだすための力」とするのである。

ギルマンは、中年女性が社会で活躍する話を、「未亡人の力」(『フォアラランナー』一九一一年一月号)や「変化をもたらす」(同誌一九一二年十二月号)などで描いている。彼女たちは、夫や子どもに仕えてきた長年の生活から足をあらい、主婦として家庭で培った経験などを社会で活用して自分自身の独立した人生を歩む。ベニグナの母親も、これらの短編に描かれた中年女性同様、それまでの結婚生活では達成できなかった個人としての社会生活を四十歳すぎて獲得する。家族の面倒をみてきた経験を生かすビジネスに生き甲斐をみいだすことで、「自信や希望や勇気をより強くもつようになり」、「全体の視野を広め、輝かせて、より確かなものにしていく」。自分の足で立つことで、女性の居場所が家庭だけではなく、社会のあらゆるところにあることを証明している。

ベニグナが母親の精神的・経済的自立を援助するのは、その不幸な結婚生活の原因が、夫の従属的地位に甘んじている母親自身にもあると考えているためである。子どもころから両親の不平等な関係を見て育ち、理不尽な権力を行使する父親を憎むにいたるが、ベニグナは、父親がその暴君ぶりを加速させるのは、母親の不甲斐なさにもあると考える。

だますために父親と友好関係を築き、間近でその生活を観察する過程で、彼女は家計の全責任を負わされる家長の苦しみを理解し、父親に同情すら寄せている。社会と遮断された生活を営む家庭の主婦には、予想しがたい男の苦しみがあることを理解するのである。両親に対するベニグナの見解が正しかったことは、父親が長い不在から戻



ったときに証明され、彼はキャリアをもって独立した妻に畏敬の念を抱く。以前のような不遜な態度もとらなくなり、夫と異なる独自の意見をもつことを当然の権利だと宣言する妻を受け入れる。そればかりか、彼女を単に妻としてではなく、独自の長所をもつ個人として敬意を払い、誇りに思うようになる。

ギルマンが家長の責任を強いられる男性に同情的であったことは、「ピーブル氏の心臓」(『フォアラランナー』一九一四年九月号)などによっても明らかである。『ベニグナ』と同時期に書いたこの短編で、ギルマンは、家中の女性を養うために、自分の楽しみを犠牲にして働き続けた男の悲哀を描く。男であるという理由だけでそのような運命を強いられる主人公、ピーブルに対して、ギルマンは分身ともいえる女性医師に「心臓肥大」という故意の誤診をさせ、残りの人生を自分のためだけに生きる機会を与えている。女性が男性に経済的依存するために、男性が自らの人生をまっとうできない現実を、男性に思いを寄せて描いている。

家父長制社会における男性の苦悩を同様に描きながら、ギルマンは、ベニグナの父親には、ピーブルほどに同情をよせることはない。家父長制の最悪の産物のように描き、父親が娘たちの憎しみの対象になり、夫が妻の神経衰弱の原因になり得ることを示す。だが彼をふたたび妻のもとに戻し、自立を果たした妻と夫婦関係を修復させていることでも明らかのように、ギルマンは、彼もまた家父長制の被害者であるという姿勢を崩すことはない。家長の重責に耐えられずに吐く暴言に、泣き、震え、神経を消耗するだけの妻に苛立ち、さらに「ドメステイック・タイラント」としての「醜さ」を増す夫を描くことで、家父長制が、女性の人生ばかりでなく、男性の人生をも破壊することを明らかにする。ギルマンは、夫の横暴さも妻の神経衰弱も、その主な原因は、夫と妻が同様に、夫が「王」で、妻はその「家臣」であるべきという、家父長制が生みだしたジェンダー概念にとらわれていたことにあると示



唆する。

ベニグナは母親の自立を援助することで、彼女が夫に従属することのない、新しい夫婦関係を築くことができるよう援助する。だがベニグナは、優れたキャリア・ウーマンを母親の家に下宿させることで、母親に異なった人生の選択もあることも示す。ベニグナが望んだように、母親は、牧師としてのキャリアに邁進する未婚の女性ときわめて親しい友情関係を築き、結果として、女性は夫がいなくても幸せな家族生活を楽しむことができることを証明する。

二人の自立した女性は、それぞれの長所を最大限に生かして互いの短所を補い合い、異性愛よりも「より広遠な範囲の幸せ」の扉を開く。ギルマンは、このような女性同士の深い結びつきをとおして、「強制的異性愛」の呪縛からの解放を提案する。当時、とくに高学歴の女性の中には、同性のパートナーと家庭生活を営む女性も多く、ギルマン自身、一時期、女性記者と同居生活を送っている（アレン 四二）。ギルマンは、エイドリアン・リッチが半世紀以上ものちに主張すること（六三二—六〇）をすでに提唱し、実践していたことになり、この点でも「フオアランナー（先駆者）」であった。

ベニグナが見届ける姉の人生は、彼女自身をも含む多くの若い女性に共通する問題を提示する。女性がいかに社会的な責任を果しつつ、言い寄る男性を正確にみきわめて個人的な幸せを達成できるか、という問題である。ベニグナは、母親の自立のために始めた下宿屋経営で、姉にも活躍の場を用意し、会計など重要な仕事を任せる。母親の弱点を補う形で、姉を下宿屋ビジネスの要職に配置し、有能な男性下宿人に姉の援助をさせる。ベニグナは、この下宿人に、家の秘密から下宿屋経営の内情まで話して姉の援助を要請したことで、姉の幸せを演出することに成

功する。二人が互いに兄弟、姉妹のように協力して仕事を進める過程で愛情を抱くようになるためである。

「美しいゆえに多くの男性に言い寄られ、間違った男性と結婚する」危険に直面していた姉は、責任ある仕事で「より多くの給料を得る喜び」を感じるようになり、その仕事をつうじて、人生のよき伴侶と出会う。かつて、手近な男性に頼ることで、父親の権力を逃れ、自分と母親の人生を立て直そうとした姉は、「自分自身のために仕事に興味をもつ」ようになり、「女性が愛し、仕事もできる」という、ギルマンが人生のゴールとして定めていた生活を志向する（ヒル 一六）。

詐欺師のテクニクを用いて家族の人生に介入したベニグナは、その後両親と姉がそれぞれ独立した新しい人生を歩み始めるのを見届ける。彼女は自分の行為を「家族への義務」ととらえているが、彼女がもたらした変化は、究極的には、家族間における人間関係の是正である。女性が男性の「所有物」として男性に忠誠をつくし、奉仕すべきものとしてみなされる男性中心の家庭を、女性の人権が保障される家庭に修正したことになる。ベニグナは、母親や姉が、男性同様、「自分自身の金を稼いだす」一人の人間として立つことで、男性と愛にもとづく共同関係を結ぶよう援助している。母親と姉に「個人としての社会的責任」を目覚めさせ、いわば「新しい女」の生き方を促すことで、二人が自らの人権を守り、男性との平等な関係を築くのを見届けている。

ギルマンは、「男性中心の文化」の第二回連載「人工的家庭」(『フォアラランナー』一九〇九年十二月号)において、家庭の目的は「子どもの世話と養育にある」と述べている。「無力な幼き子どもを扶養し、守り」「そうして人種を改良する」というその見解には白人優越意識も垣間みえるが、ギルマンがこのエッセイで問題にするのは、家庭の目的を男性が変えてしまったということである。「子どもに最上の奉仕を施すべき機関が、男性自身に奉仕し、

男性の慰め、権力、誇りを示す手段になった」というのがギルマンの主張である。

このような「男性が作った家庭」では、母親が社会の活動から遮断された「家政婦」という「劣った」地位におかれるために、子どもは、「社会的遺伝形質を半分盗まれている状態にある」と、ギルマンは言う。ベニグナは、そのようなハンデを背負う子どもでありながら、並はずれた社会性を発揮してその環境を作り変える。「男性的要素が多すぎるために人間性が損なわれている」父親独裁の家庭を、「父親と母親とが人間的に平等な通常の家」に改革し、姉が同様の家庭を築くよう援助している。「子どもは親を批判する権利はない」という社会の教えに反する「不自然な娘」であることを自ら認識しながら、密かに家族を操って、子どもの側から改革を挑んだことになる。

#### IV 人権を侵害された少女から「新しい女」へ

ベニグナのコンフィデンス・ゲームは、家父長制社会における少女への人権侵害を跳ね返す手段としても機能している。ギルマンが子どもの養育に関心をもっていたことは、『子どもたちについて』（一九〇〇年）をはじめ、その著作の至るところで確認できる。『ベニグナ』においても、幼稚園教師になるべく勉強していた母親が、「子どもの文化」についての深い関心を示すが、父親はそれを「現代の病的な愚鈍さ」のきわみとして退け、娘たちの幼稚園教育を阻むくだりが描かれている。子どもの養育で、ギルマンがとりわけ関心を示したのは、「従順であること」を要に据えた教育課程によって子どもの人権が侵害されることである。

『子どもたちについて』でギルマンは、「服従する習慣が、感受性の強い子どもに強要されると、判断力や意志力を働かせることができなくなる」と述べている。『ベニグナ』は、男性優越主義者の父親に服従を強いられる少女の人権侵害を告発する物語でもある。不服従のそしりを免れる手段として、ベニグナがコンフィデンス・ウーマンの性格を形成し、やがては「新しい女」への道を辿ることで、不本意な服従を退ける過程が描かれる。

ベニグナは、親への不服従に対する「罰」を逃れる努力のなかで、コンフィデンス・ウーマンの基本的性格とも言うべき二重性を身につける。父親に「奴隷にされ、監房に入れられている」と感じる家庭で、彼女は「二重生活どころか、三重生活ですら」しなければ生き残れないと悟る。「酷い父親」をもつ子どもの苦境を牧師に訴えても、服従の義務を諭されるばかりか、親を批判する子どもの「異常さ」を指摘される。

「三歳の子もだつて良識をもっている」と考えるベニグナは、子どもの尊厳に関心を払わない社会に対抗し、「奇妙な」子どもというそしりを免れるために本心を隠す。家庭でも、社会でも、子どもの人権が守られない状況から身を守るために、周囲が望む「ただの女の子」を演じることになる。ベニグナが本心を明らかにしないコンフィデンス・ウーマンの二重性を身につけるのは、たとえどんなに理不尽な親でも、子どもは服従しなければならぬという社会理念のなかで、自らの信念を貫き生き残るための苦肉の策でもある。

ベニグナは、二重生活を営むことによつて、当然ながら深遠な内的世界をもつに至る。「子どもが犬か馬のようふるまう」と考える父親が、「避けがたい事実」として立ちはだかる家で、彼女は何が起ろうと黙って聞き、観察する習慣を身につける。「たくさんのことを考え、機が熟すまでは決して発言しない」日常のなかで、彼女は幼くして人間についての深い洞察力を身につける。

同時に「自分の心にすばらしい世界が開かれている」ことを発見し、その世界に「足を踏み入れる」。心深くに自由な世界をもちながら、外見的には「他人と変わらない人物のように見せかけ、誰にも悟られずにすばらしいことを成し遂げる」という「野心」を抱くようになる。ベニグナの物語は、彼女の内的世界の自由な発露であり、その野心達成の痛快な記録である。

「ただの女の子」としての軋轢と闘わなければならぬベニグナにとって、その野心達成は、伝統的ジェンダー概念をこえる能力を自ら養成することによって可能になる。人気小説に登場する「天使のような娘」のように、酔っぱらいの父親を更生させて栄光的な死を迎えることができないと悟ると、彼女は自分の苦境を有益なものにしようとして決意する。ギルマンは、「人工的家庭」において、親が子どもに悪影響を及ぼすことを「罪」と呼んでいるが、ベニグナは、その罪が招く弊害を免れるために「人について学び、いかに人を操るか」を鍛錬する。

ベニグナの少女時代は、「父親を排除する」コンフィデンス・ゲームを働く力をつけるまで、この人間操作術を練習によって磨くことに費やされる。たとえば彼女は、「女は花を育てる頭も技術もない」と主張する父親をかわして、母親の希望する花壇を作りあげ、父親の偏見を覆す。別の機会には、娘は家にいるべきだと信じて疑わない父親の目を盗んで、遠方に住む祖父の家まで一人旅を決行する。このとき学んだ効率的な農場運営は、やがて挑むことになる下宿屋経営の下地ともなり、ベニグナは、父親が望む「従順な女の子」であつたら習得できない能力を養っている。

「酷い親」に屈せず、自らの信念を貫くために、ベニグナは、「強く、技術に優れ、自らが秘密兵器の兵器庫」のようでありたいと願う。その願いを達するために彼女がとる手段は、いかなる知識や技術も貪欲に吸収することで

ある。その姿勢は、ジェンダー偏向教育に対する現実的な態度にも表れる。男子には木工細工や金属細工を教え、女子には料理と裁縫しか教えない学校教育に対して、彼女は当初、密かに怒りを表す。だが、やがては、そのような教育からでも得られる「利益」に目を向ける。「料理や裁縫によって頭脳の訓練ができる」と考え、「いろいろできるようになれば、もつと強くなれる」というとらえ方をする。じじつ、料理や裁縫は彼女の特技に加えられ、社会奉仕や仕事の幅を拡大するための強力な「秘密兵器」となる。

ジェンダー偏向教育に柔軟に対処する一方、ベニグナは、その偏向をこえる力を養う努力も惜しまない。「もし女子に良識があつて、馬鹿な臆病ではないことがわかれば、男子に軽蔑されない」と、伝統的に男子の特技とみなされる能力を開発することにも力を尽くす。そのような能力を身につけることで、都合のよい口実をもうけては、男女差別意識を正当化する人びとの思い込みを覆す。

「心を傾けて専心すれば、なんでもできるようになる」をモットーに、ベニグナは、父親が禁止するダンスやスポーツ、タイプなどにも密かに挑戦する。その挑戦が発覚し「お前は親の言うことを聞かない」と叱責されても、服従しないことを謝ることはない。必要な能力や技術が達成されることこそ重要ととらえ、父親の叱責を問題にすることはしない。彼女が謝るのは、父親に不愉快な思いをさせたことのみである。

アン・レインは「シャーロット・パーキンス・ギルマンの文学的世界」において、ベニグナを「女性版ハック・フィン」(XXXXIII)と呼んでいる。ベニグナは、人生の悩みや疑問を読者に吐露しながら、社会をすり抜けて生き残ることに、たしかにハックに似ている。そうすることで、社会の欺瞞や虚偽を読者に意識させ、究極的には、いかに「人間が互いに残酷になれるものか」を示すことにおいても、ハックに共通する(山口へ1)七〇―九二)。



だが、ハックがそのような社会で成長するのを拒絶し、最終的には自然のなかに逃亡するのに対して、ベニグナはまったく異なった方向に向かう。「人生の目的」を「成長すること」におき、あくまでも社会において責任を果そうとする。彼女は、男性中心社会で少女としての生きにくさを痛感しながらも、自分が「成長すること」でその不便さを克服する。

じじつ、いかなる機会もとらえて自らの成長を心がけ、そうして蓄積した知識や技術を「世の中の不正をただす」ために使う。ギルマンが描いた「女性版ハック・フィン」は、社会を改革する目的をもって小説を書いた作者の意図を反映して、家父長制社会の「不正をただす」には、少女や若い女性はいかにあるべきか、という模範を示している。

模範としてのベニグナは、物語の終結部近くには成人に達し家を離れるが、広い世界をひとりで生き抜く力を示す。ギルマンは、もしベニグナが親を批判することもなく、従順なだけの子どもであったら、もつことができなかった力を備えていることを強調する。彼女が蓄積した知識や技術は、生まれ育った家庭を改革するコンフィデンス・ゲームの「秘密兵器」であるが、究極的には、彼女自身が社会で働くための確実な後ろ盾となる。それらは、男性に従属することなく、男性同様に社会的責任を担う「新しい女」になるための「秘密兵器」となる。

二十一歳の彼女は、農場運営や下宿屋経営で培ったビジネス手腕から、独学で習得した速記、タイプなどの技術まで、「自分の経済状態に影響を及ぼすような仕事」に就く「卓越した仕事人」の能力をもつ。彼女の決意は「さらに大きく成長すること」であり、目標は、五十代に、大学の学長、高級官僚、大起業家など、「きわめて高度な技術や知識が要求される難しい職業」に就くことである。ギルマンは、家を離れたベニグナにさまざまな職業を試

させ、労働者階級から有閑階級の世界までを覗かせて、「人生についての知識をじかに得る」機会を与える。それは、フェミニズムを「女性の社会的めざめ」と定義したギルマンが、「新しい女」には必要と考えた社会的経験である。

ギルマンにとって、「新しい女」は「セックスの関係によって経済的地位を築くことのない」「人間」である。ベニグナは、『経済学』におけるギルマンの主張を実践するべく、「社会に対して経済的関係をもち」、「一人の人間として歓迎され、受け入れられる」よう努める。だが彼女は、コンフィデンス・ウーマンの策術を使わずには、社会で働くことができない。女性の「性的魅力」がその経済的地位を築く唯一の手段となっている社会では、たとえ男性同様の人間になるべく知識や技術を蓄えていても、それだけでは勝負できない。

ギルマンは、ベニグナが家庭にいたとき同様、コンフィデンス・ウーマンの策略を駆使しなければ社会的責任を果たすことができない現実を描くことで、男性のみが人間と思われている社会で、人間になろうとする「新しい女」の試練を示す。それは同時に、そのような社会での生き残り策を「新しい女」たる読者に教示することでもある。

ベニグナが、広い男性社会で仕事をするためにコンフィデンス・ウーマンの術策を使わなければならないのは、その「性的魅力」を隠すためである。「男性中心の文化」におけるギルマンの主張によれば、「男性が作った世界」では、「女性にセックスのみを見て、人間性を見ない」。そのような世界で女性が男性同様の経済的自立を果すためには、ベニグナのようにその「性的魅力」を排除する必要がある。

ベニグナは「舞台に立つ野心はない」と言いながらも、「より大きな社会という劇場」でよりよく演じるために、俳優の下で働くことを不可欠と考える。そこでは、「若くみずみずしく、魅力がないとは言えない」顔立ちを隠す

ため、実際の年齢より老けてみえる化粧品に興味を示す。ギルマンは、ベニグナのこのような興味をおして、男性同様、社会的責任を果す人間としての「新しい女」は、その責任を果す際に性的魅力を「売り物」にしないことを強調する。

その一方、ベニグナが「危険因子」を取り除くと称して「変身の決意」をすることで、女性がその性的魅力を変身によって排除しなければ、男性に「買物の対象」とみなされてしまうことを示す。ベニグナは社会での「経験の輪をできるだけ広げる」過程で、仕事を変えるたびに名前を変え、別の人格を演じる。「私はたかさんの名前をもち、たかさんの衣装をもつわ……どこでも仕事を得られるようによく商売を学び、地球上のどこへでも行くわ」と彼女は言う。ギルマンは、次つぎと変身して世間を渡るベニグナをおして、女性が社会で奉仕するためには、コンフィデンス・ウーマンのように変身して社会をだまさなければ生き残れない皮肉を示す。

ベニグナの物語は、彼女が「まさに私の好きなタイプ」と呼ぶ男性との結婚を示唆して終る。十九世紀に広く読まれた女性小説同様のハッピー・エンディングである。だが、二十世紀を生きる「新しい女」にとっての結婚は、夫に「所有される」とことと引き替えに、生活保障を得る十九世紀のヒロインとはまったく異なった意味をもつ。ベニグナにとって結婚は、愛する人に出会った結果として、起るかもしれないことであり、人生の目的ではない。

彼女は家族と離れて自活の道を探るにあたって、七十歳に達した自分を想定して人生設計を立てるが、その計画に結婚は入っていない。健康、金、家、友人などを人生に不可欠なものとしてあげながら、家族については、計画するものではないという考え方を示す。「結婚しない女性は確実な割合で存在するのに、若い女性たちが結婚しないことを想定して人生計画を立てないことがおかしい」と主張し、「そういう機会があれば結婚する」という姿勢

を貫く。

ギルマンは、ベニグナが経済的に自立していることで、「生活のために間違った男性と結婚する」危険がないことを強調する。ベニグナの将来に予想されるのは、その子どもがコンフィデンス・ウーマンにならなくてもよい家庭を築くことである。ギルマンは、物語の最後にベニグナが築く家庭のあり方を示唆する。ベニグナが好きになる男性は、スコットランドからやってきた従兄で、ホーム・マックアヴェリという名前であるが、彼女は「マックアヴェリを名乗り続けることができるとは思っていなかった」と言う。これは、結婚しても、ベニグナが本来の自分を変えることも、隠すこともなく、「ホーム」を築くことを目指しているといえる。かつて、「結婚しては、ベニグナ・マキヤヴェリではいられない」と言い、ベニグナが間違った結婚をしなかったことを思えば、名前についてのこの発言が重みをもつ。

## V 若い「普通の」女性のための文学

『ベニグナ』は、少女が大人へと成長する過程でその密かな思いを次つぎと達成する痛快な世直し小説である。その痛快さは、彼女が読者にだけに本心を打ち明けながら、権力をもつ大人たちまでも思いどおりに操るために、いっそう増幅される。父親が権力をふるう家庭に生まれた彼女が「革命」を挑み、「不正をただす」ことを考える、彼女はスーパーウーマンのような印象を与える。

だが、ギルマンの意図は、ベニグナをあくまで「普通の女の子」として描くことにあったと思われる。ベニグ

ナ自身が、自分の教育を「普通」と書き記しているように、彼女は、女子高等教育が著しい発展を遂げた時代にあつても、さしたる学校教育を受けていない。天賦の才に恵まれていたわけでも、特権が与えられているわけでもない、平均的な少女である。ギルマンが目論んだのは、このようなどこにでもいる少女がいかにも「新しい女」になるかを、「普通の女の子」の読者に示すことであつたと考えられる。

ギルマンがベニグナをとおして「新しい女」のマニユアルを示そうとした裏には、当時の文学に対する深い不満がある。「男性中心の文化」の第五回連載「男性の文学」（『フォアランナー』一九一〇年三月号）においてギルマンは、「男性中心の文化のもとで、小説は、女性の人生の真の姿を描いてこなかった」と主張する。「もし小説がよいものであれば、人生を簡単に、すばやく、正しく教えることができる」と、小説の有用性を強調する一方、若い女性がワンパターンの小説を読まされている現実を指摘する。出版されている小説の九十パーセントが「恋愛小説」である現実である。

「文学が芸術のなかでもっとも強力に必要なものであり、小説が文学のなかでもっとも幅をもつ形式である」と信じるギルマンは、「ひと目惚れから結婚まで、愛ばかりを描き…その後、幸せに暮らしました」で終る小説であふれる当時の状況を憂いている。そのような小説は、ギルマンによれば、「女性を追いかける男性の冒険物語」である。「愛の物語は、男性が女性を愛する物語」であり、そこには「女性の人生のいかなる姿も描きだされていない」というのが、ギルマンの主張であり、嘆きである。『ベニグナ』は、「男性化した文学を世の中に送りだし続けていた」当時の出版界に対するギルマンの挑戦でもある。

その一方、ギルマンは、当時の雑誌ブームを巧みに利用して『ベニグナ』を書いたともいえる。ギルマンが『フ

『オアランナー』を出版していた二十世紀初頭のアメリカでは、一家庭に四冊の割合で雑誌が講読され、「その数も続く二十年のあいだに劇的に増え続けていた」（ホーニー 三）。とくに女性雑誌は爆発的な人気をおさめ、その人気は中流階級女性の社会進出とともに高くなり、その動きに支えられたという分析もされている（ウッド 一二三）。その反面、内容は依然として結婚と家庭を強調する傾向にあり、一九二〇年に女性が参政権を獲得した後でも、多くの記事がフェミニズムを攻撃し、ファッションや室内装飾が主流であった（ホーニー 四）。社説は女性の商業界への参入を抑制するよう忠告し、広告は家事を簡単にする利器を宣伝する傾向にあった（四）。このような現象は、「ギブソン・ガール」などによって「新しい女」のイメージが拡散されても、それが現実に浸透するまでには時間を要することを証明しているといえる。

だが、各誌が敏腕編集長を雇って力を入れていた小説には、記事や社説などには表れない変化がみられ、「新しい女」も登場しつつあった（ホーニー 四）。家父長制への反意を明白に表し、社会で仕事をすることによって自己実現を願い、男性からの独立を達成しようとする女性が描かれ始めていたのである。レインは、『フォアランナー』の短編が、そのスタイルや簡潔さなど、当時の女性雑誌の手法で書かれていることを指摘している（一）（XXXX）。ベニグナのような新しい女性を自分の雑誌に登場させ、平易なスタイルで描いたことは、ギルマンが、人気の女性雑誌に表れた新しい傾向をすばやく汲み取った結果、あるいは先取りした結果ともいえる。

ベニグナを「普通の女の子」から「新しい女」に成長させることで、女性の人生を描こうとしたギルマンは、彼女に「普通」とは言い難い能力を一つ与えている。手近にある物語本や雑誌から学ぶ能力である。「実人生よりも遙かに広範囲の人生を本で知ること私たちは成長するべきだ」と主張していたギルマンは、ベニグナにその主張



を実践させている。

彼女は、ギルマンが新しい考えを啓蒙する目的で出版した雑誌『フォアランナー』に登場するキャラクターにふさわしく、本や雑誌などを読むことによって、新しい知識や技術を習得する。そのような知識や技術は、彼女の新しい生き方を支える「秘密兵器」の重要部分を形成する。トム・ソーヤーのように、本を読むことで子どもらしい非現実の世界にとらわれることも、ハックのように本に不信を抱くこともなく、ベニグナは、ギルマンが「男が作った世界」と呼ぶ家父長制社会で、自らの人生を探しだすガイドとして出版物を使っている。

ベニグナは、本や雑誌なくしては、コンフィデンス・ウーマンとしての存在価値を失う。彼女は小説や物語を読むことで、「善き悪人」というコンフィデンス・ウーマンとしての姿勢を確立するばかりでなく、そのような印刷物の助けを借りて、人を操る方法を考えだし、人生の困難から脱出する方法を思いつく。「頭のよい善人」こそ、自分の思いを達成してかつ生き残る方法だと悟るのは、幼いころからの多読の賜である。「本という本で悪人が最後に頓挫する」ことに対して、彼女は、悪人たちが読書もせず、読書から学ぶことがないのか、と訝る。「善い悪人」になって生き残り、「耐えて、諦める」だけの善人を助ける決意をするのは、「小説や物語をからたくさんのことを学んだ」結果である。そのような人は「大好きな本のどれをとってもみつけることができない」という、その独自性に意気を感じる結果でもある。

ベニグナのコンフィデンス・ゲームは、読書によってその存在を確立している詐欺師にふさわしく、読書によって得た知識によって稼働する。姉の駆け落ちを阻止する際にも、ベニグナは、「駆け落ちについての本をたくさん読んでいたので、野性的だが、実直で命がけの恋人と、下心ある悪党との区別ができる」と言う。「読書して益を

得る」姿勢はたえず貫かれ、彼女は姉に嫉妬心を抱かせて、駆け落ちを断念させるにあたって、「嫉妬心」について本で学んだことが効果を發揮する。父親に詐欺をしかけるとときには、その読書の範囲は、父親の興味にしたがってスコットランド文学から機械工学や電気工学などにも及ぶ。そのような読書によって得た知識が、父親との友好関係を築く鍵になり、彼を操る原動力になることは、すでに述べたとおりである。

ベニグナが、本を読むことで、人生を歩む「力」となる知識を獲得し、人生に「変化をもたらず」コンフィデンス・ウーマンとしての姿勢を確立することは、本がさまざまな情報を伝えるものであれば、さほど目新しいことではない。だが、ベニグナの読書は、雑誌を發行することで自分の斬新な考えを啓蒙しようとしたギルマンの意図を強く反映して、きわめて目新しい部分も含んでいる。ベニグナは、「新しい女」になるべく奮闘するなかで、思想や知識だけでなく、ダンスやスポーツなどの実技や訓練をとまなうものまで読書によって習得している。

ベニグナは、妙齡に達した娘に「礼儀正しさ」を要求する母親に背いて、身体的にも強くありたいと願う。ギルマンは、女性の健康に人一倍関心を示し（アレン 三三三）、「不自然な母親」（『フォアラナー』一九一六年十一月号）などでもその重要性を説いている。ベニグナには、ギルマンのこの関心が強く投影されているが、問題はその方法論である。ベニグナは、身体を鍛えるための体操についても、本でその知識を習得し、ひとり屋根裏部屋で挑んでいる。ダンスについても同様であり、彼女は読書によってダンスのステップを学び、屋根裏部屋で密かにダンスする楽しみを味わっている。

ベニグナは、「やりたいと思うことはする」という主義を貫き、柔術やフェンシングも習いたいと言いが、ギルマンはこのようなベニグナを描くことで、本や雑誌のもつ可能性を示す。ベニグナのように、意志さえあれば、町

に行かなくてもダンスを楽しむことができ、学校に行かなくても、あらゆることを独学で学ぶことができるという可能性である。ギルマンは、ベニグナの「読書学習法」をとおして、都市から遠く離れたところに住んでいる人でも、郵便で届けられる安い読物で、なんでも学べるという可能性を示している。因みに、『フォアランナー』は、スタンド販売はされずに、契約講読者に郵送されるが、政治団体などをとおして購入・配布されるシステムをとり、年間購読料は一ドルであった（セプレア 一八八—八九）。

ギルマンは、読書によっていかに知識を得るか、という具体的な方法をも指南している。ベニグナは、祖父の農場運営を改革するが、その改革も、読書によって模範的な酪農について学ぶことで達成する。当時の作家エドワード・エヴェレット・ヘイルによる言葉を引用し、集中した読書で専門知識でさえも得られることを実証する。「もし一つのテーマについてひと冬かけて読書すれば、偉大なる専門家を除けば、他の誰よりもそのことについて知ることができる」と。

ベニグナはさらに、どのようにに必要な知識に辿り着くことができるか、という具体的な手順についても言及する。「最新版の百科事典で概略をつかみ、そこに挙げられている参考文献に何冊かあたり……専門雑誌の最新論文を得る……もし最重要ポイントの選び方がわかれば、一日二口うちにはたくさんのお話を学ぶことができる」と、概略から詳細へと知識を深める方法を教示する。ベニグナは、図書館の司書にこの方法を習ったと言い、学校でこのようなことを教えるべきだと主張している。

読書による独学で成長するヒロインを描く文学は、このような「変化をもたらす」ためのメッセージが満載され、教訓的になりがちである。『ベニグナ』は、たしかに、「新しい女」になるための具体的な手順や教訓にあふれ、マ

ニユアル本の性格をそなえている。『フォアラランナー』の宣伝文で、ギルマンがその目的の一つに「実際のな提案や解決策を提供すること」を掲げていることからすれば、掲載された小説が、そのような具体的な情報を盛込んでいることは当然ではある。だが、ギルマンはマニユアル本のような堅苦しさを打ち消す工夫を施すことで、読者が楽しみながら、「実人生よりも遙かに広範囲の人生」を知ることができるように配慮している。広範囲の人生を知ること、読者が社会環境を作り変える第一歩を踏み出すことを提案している。

教訓的な堅苦しさを打ち消すためにギルマンが施した最大の工夫は、ベニグナをコンフィデンス・ウーマンにしてそのゲームをユーモアあふれるものにしたことである。周囲の大人たちには「ただの女の子」にしか過ぎないベニグナが、自らの才覚のみを頼りに、父親をはじめとする大人の権力者の裏をかくことで、読者は「胸のすく思い」を感じる。ベニグナ自身、密かに人を操り、現実を変えることを「世界を征服する」と呼んでいるが、読者はその面白さを共有することになる。ベニグナが読者にその密かな思いを自由に綿々と語り、コンフィデンス・ウーマンの奥の手をみせるためである。

彼女の最大の目的は、か弱き善人を助けることであるが、彼女自身が非現実的な「正義の味方」ではないことも、面白さを倍加させる結果となる。たとえば、迷惑な下宿人を追い出すときのように、悪人にも負けない悪知恵をもって問題解決にあたることや、ユーモアを生む。ユーモアは細部にもあふれ、子どもらしい虚栄心を満足させる言動や、ジェンダーをこえる心身の強さを鍛える場面など、至るところに用意されている。ベニグナは、十九世紀の自己犠牲的な少女とは異なることを宣言し、社会環境を変えることを自ら「面白い」と感じて実行することで、読者の共感を呼ぶ。

ギルマンは自伝において、なぜ書くか、を自らの言葉で述べている。『フォアランナー』創刊に至るいきさつを語りながら、彼女は自分の作家としてスタンスを明らかにする。「力量のあるプロの作家」でもなく、「芸術家として」芸術性を追求する作家でも、「生計を立てるために編集者の喜ぶものを書く」作家でもない、と自らを定義する。そのうえで、自分が書く目的は、「大切だが、まだ広く知られていない重要な真理を表現すること」にあると言つ。

この発言を『ベニグナ』の内容と照らし合わせて考えると、ギルマンがこの小説を書くことで目論んだことがより明確になる。「男性中心の文化」のなかで、少女がいかに人権を守って独立を達成するか、なぜ家族の人間関係を矯正するか、その理由と具体的方法こそが、ギルマンがとくに若い女性に向けて発信した「重要な真理」である。『フォアランナー』に掲載されたエッセイは、その「重要な真理」を自分の言葉で直裁に論じ、短編は、その「真理」の断片を理屈抜きの人生に照らして一つ一つ解決策をもって描く（フィッシュキン 一三二六）。連載小説としての『ベニグナ』は、一人の少女の「新しい女」への成長を、興味を誘うエピソードで繋いで描くことで、ギルマンが伝えたい「真理」を総合的に提示している。

『フォアランナー』の宣伝文でギルマンは、「世の中の正しい場所にいる男性、計り知れない力をもつ女性、もっとも大切な市民としての子どもについて論議する」と述べている。『ベニグナ』は、これら三つのテーマを、ヒロインの「革命」を描く過程ですべて網羅している。『ベニグナ』には、ヒロインの性格はもとより、母親の性格さらには、教室内のエピソードなど、ギルマンの自伝的要素が多々盛り込まれている（ブレイク 六）。ギルマンは、自らの経験をも盛り込みながら、小説の形式を用いて、若い女性読者に「面白く」「新しい女」の模範を示したので

ある。

自伝によれば、ギルマンは、『フォアランナー』に掲載する年間本四冊分に匹敵する分量を書きながら、その赤字を埋めるために、さらに執筆や講演をしなければならなかったという。それでも、ギルマンが七年にわたって発刊し続けたのは、十ドルの帽子を買うことには安いと感じる女性が、年間一ドルの『フォアランナー』を講読することを「不当に高い」と感じる状況、さらには批評家たちもその出版を無視する状況を変えたいと願ったからに違いない。

「自分は小説家ではないことが明白に証明された」とギルマン自身は、『フォアランナー』に掲載した小説を指して述べている。だが、『ベニグナ』は、ギルマンが目指したとおり、「男性化された文学」が席卷する時代にあつて、「女性の人生の真の姿を描いた小説」であり、作者のメッセージは、百年近い時を経た現代の若い読者にも十分通じる威力をもっている。それは、ギルマンが正真正銘の「フォアランナー」であつた証拠でもある。

## 注

(1) 本稿には、拙稿『An 'Unnatural' Daughter's Revolution: Benigna Machiavelli as a Confidence Woman』の一部重複する部分がある。

(2) 「新しい女」現象は、ヨーロッパ、アメリカ、日本など、世界的規模でほぼ同時期に起きている（ペロー 五、尾形 一、笠間 一二）。そのようななかで、ギルマンの著作は、ヨーロッパや日本でいち早く紹介されている。ギルマン自身が自伝で述べるところによれば、月刊誌『フォアランナー』は、ヨーロッパだけでなく、インドやオーストラリアなどでも読まれたという。日本においては、日本女子大の卒業生、



大多和たけ・小山順子・小出貞子らが『女性と経済学』の翻訳に挑み、初版から数えて一三年後の一九一一年（明治四四年）には、『婦人と経済』として出版している。

(3) 引用部分の日本語訳は、すべて拙訳。

(4) 「新しい女」については、“Clash of Cultures in the 1910s and 1920s”やJean Matthews, Carroll Smith-Rosenbergなどを参照。

(5) 女性の職業進出を男性との比率で見ると、「聖職、法律、建築、医学、写真、教職、看護、歯学、編集、報道については、一八七〇年には、六・四パーセント、一九〇〇年には、一〇パーセント、一九二〇年には、一三・三パーセント」と増えている（アモンズ 八二二）。「事務販売、速記、タイプ、簿記、レジ、会計などにおいては、一八七〇年には、〇・八パーセント、一九〇〇年には、一三・三パーセント、一九二〇年には、二五・六パーセント」とよりいっそうの増加を示している（八二二）。

(6) 十九世紀後半に設立された女子大学の代表的なものとして、ヴァッサー（一八六五年）、スミス（一八七五年）、ウエルズリー（一八七五年）、プリン・マー（一八八四年）などがあげられる。これらの女子大学は、ハーヴァードやイエールなど男子エリート大学に対抗するカリキュラムをそなえていた。

(7) 「フォアランナー」創刊に至る経緯は、ギルマンの自伝に詳しい（三〇三—〇五）。

(8) 当時の女性雑誌に掲載された「新しい女」の短編については、モーリン・ホーニー編集の作品集を参照。

### 引用文献

Allen, Polly Wynn. *Building Domestic Liberty: Charlotte Perkins Gilman's Architectural Feminism*. Amherst: U of Massachusetts P, 1988.

Ammons, Elizabeth. "The New Woman as Cultural and Social Reality: Six Women Writers' Perspectives." Heller and Rudnick 81-97.

Blake, Joan. Introduction. Gilman, *Benigna Machiavelli* 5-8.

- Ceplair, Larry, ed. *Charlotte Perkins Gilman: A Nonfiction Reader*. New York: Columbia UP, 1991.
- "Clash of Cultures in the 1910s and 1920s." 1 November, 2003. <[www.history.ohiostate.edu/projects/clash/NewWoman/newwomen-page1.htm](http://www.history.ohiostate.edu/projects/clash/NewWoman/newwomen-page1.htm)>
- Cott, Nancy F. *The Grounding of Modern Feminism*. New Haven: Yale UP, 1987.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. 1989. New York: Free P, 1997.
- Fishkin, Shelley Fisher. "Making a Change': Strategies of Subversion in Gilman's Journalism and Short Fiction." *Critical Essays on Charlotte Perkins Gilman*. Ed. Joan B. Karpinski. New York: G.K.Hall, 1992. 234-48.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Benigna Machiavelli*. 1914. Santa Barbara: Bandanna, 1994.
- . *The Charlotte Perkins Reader*. Ed. Ann J. Lane. Charlottesville: UP of Virginia, 1980.
- . *The Forerunner: A Monthly Magazine*. Vol.1 (November 1909-December 1910). MacLean, VA: IndyPublish.com, n.d.
- . *Concerning Children*. 1900. Walnut Creek, CA: Altamira P, 2003.
- . *Herland*. 1915. New York: Pantheon, 1979.
- . *The Living of Charlotte Perkins Gilman: An Autobiography*. 1935. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- . *The Man-Made World*. 1914. Amherst, NY: Humanity, 2001.
- . *What Diantha Did*. 1912. MacLean, VA: IndyPublish.com, 2003.
- . *Women and Economics: A Study of the Economic Relation Between Men and Women as a Factor in Social Evolution*. 1898. Mineola, NY: Dover, 1998.
- Heller, Adele, and Lois Rudnick, eds. 1915. *The Cultural Moment: The New Politics, the New Woman, the New Psychology, the New Art, and the New Theatre in America*. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.
- Hill, Mary A. Introduction. *The Man-Made World* 7-20.

- Honey, Maureen. *Breaking the Ties that Bind: Popular Stories of the New Woman, 1915-1930*. Norman: U of Oklahoma P, 1992.
- 笠間千浪「ジェンダー秩序による〈セクシュアリティ〉編成とフェミニズム言説—その限界と可能性の分岐点—」『ジェンダー・ポリティクス』のゆくえ』神奈川大学人文学研究所編 勁草書房 2001, 1-54.
- Kuhlmann, Susan. *Knave, Fool, and Genius: The Confidence Man as He Appears in Nineteenth-Century American Fiction*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1973.
- Lane, Ann J. <1> "The Fictional World of Charlotte Perkins Gilman." *The Charlotte Perkins Gilman Reader* xv-xlvii.
- . <2> *To Herland Beyond: The Life and Works of Charlotte Perkins Gilman*. New York: Pantheon, 1990.
- Matthews, Jean. *The Rise of the New Woman: The Women's Movement in America, 1875-1930*. Chicago: Ivan R. Dee, 2003.
- 尾形明子 「『青鞥』の女たち・その5——バッキンクの嵐のなかで「新しい女」宣言」 31 October, 2003. <[www.jk.sk.jp/j/key/200301.htm](http://www.jk.sk.jp/j/key/200301.htm)>
- Perrot, Michelle "The New Eve and Old Adam: Change in French Women's Condition at the Turn of the Century." *Behind the Lines: Gender and the Two World Wars*. Ed. Margaret Randolph Higomet, et. al. New Haven: Yale UP, 1987. 51-60.
- Rich, Adrienne. "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 5 (1980):631-60.
- Rudnick, Lois. "The New Woman." Heller and Rudnick 69-81.
- 佐藤宏子 「タブーに挑む」『英語青年』138.8(1992):41-43.
- Scharnhorst, Gary. *Charlotte Perkins Gilman*. Boston: Twayne, 1985.
- Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.
- Yamaguchi, Yoshiko. <1> "The Stranger Motif in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Journal of Yamanashi Eiwa College* 21 (1988):70-91.

---.<2> "An 'Unnatural' Daughter's Revolution: Benigna Machiavelli as a Confidence Woman." *Bulletin of The Institute for Research in Language and Culture, Tsuda College*. 18 (2003): 5-14.

Wood, James P. *Magazines in the United States*. New York: Ronald P, 1971.